一人の空

福原哲郎

昔の神々が鎮まる過去の空でその心を失い、新しい神々が生きる未来の空で無数の心を想い、ふたつの空を行き来して腰定まらぬ揺れる舟子よ。おまえはすべてを満たし終った至福であるのでもなく、すべてを満たし得る至福であるのでもない。おまえは永遠に開き咲き流れ続けねばならぬ貧しい心の河であり、心の開花と顕象は、膨大な精神圏の遺産からも遠ざかり、無限定な可能世界からも遠ざかり、おまえがいまここにこうでしかないことの貧困からはじまる。すでに行われたことを含まず、いまだ現われぬことを含まぬ、ひとつの場所があり、見出すならば、はじめにおまえは、記憶と予感の一切のきずなから断たれ、父と母のふたつの故郷の中間に投げ出された者として、感情を失い、空白となり、蒼白な一人となるだろう。現在の空は、なにものも存在しない虚空、かつて現われたことがない無際限の異貌のものが、これから現われる場所である。一人の虚空に到った恐れの中で、はじめて過去圏の連鎖の糸と未来圏の予感の糸とは互いに出逢う。おまえの死なんばかりの頼りない虚空の中で、記憶の総体からひとつの記憶が残され、予感の総体からひとつの予感が現われ、おまえはふたつのものをたわめておまえの意志をつくる。おまえがいつかそこで火を燃やし、おまえがいつかそこに真直ぐに立つならば、おまえは心の王国をになう一柱の神の子をおまえのうちに養うだろう。

焚かれたことがない夢の倉があり、飲み干されたことがない花々の杯があり、輝いたことがない星々の眠りがある。おまえにひとつの言葉があり、百億のおまえに無辺際の歌があり、おのおのひとつの言葉を額にしるし、おのおの霊を受けよ。言葉は遠い彼岸世界への橋である。言葉よ、神の無言の静謐に到るためのせつなくはげしい言葉宇宙の営みよ。光への意志として目醒め、流

れゆくもの自らが覚える流転の震え。彼岸に光の船が発つならば、言葉はその光の燭台を務めることだろう。一人の空で、意志として生れた言葉が、自己の運命に従って自らを前方に投げ、自らの外側を歩きはじめる。おまえ自身は言葉の宇宙を抱えて静かな受霊の庭における鎮魂に踏みこみ、さらになにものかを呼び寄せるために橋を渡りはじめた。期待にふるえつつ、その期待が霊肉が一致和合する祝福された水面で結ばれることを漠然と願いつつ……。しかし、やがておまえは渡るほどに踏み迷ってゆくだろう、冷やかな拒絶の門に行き当り、そこにおまえが倒れてゆくだろう。神域への両刃の剣である人間の意志に含まれた傲慢に対する、遠い咎めの声が聞える……。おまえはその一人の空でなにごとを望んでいたのか。それは自己の全救済を諦めきれずに、聖霊を自己の肉体の根にまで降さんとしていた神域に対する侵犯の罪であろうか。意志は全救済を恃むことしかできない。言葉は自分が神となる夢を捨てきれずにいるのだ。しかしまたこの咎めの声が聴えるところまで行かねば言葉は霊を受け得ず、傲慢の罪に触れねば拒絶の門をくぐれず、意志は意志することの煩いを解き放つことができない。行き暮れた時、すでに一切が没し去り、ただひとつ残された意志の、おまえの側から意志することの営みがそこに終ってゆく。おまえは霊肉の一致を保つ自らの自力を使い果したのだ。そこにおまえは、おまえ自らの鎮魂のあきらかな限界を、与えられた自力門の隠れなき涯を見出すだろう……。意識の最後の部屋で霊化されるものが、肉ではなく、言葉であるとするならば、おまえの手が神域の中の永遠によく差しのばされることを得んがために、おまえの現身がまず一人の空で行き暮れ、現身が肉ある者の悲哀として意識されるであろう個体者としての制約をくぐらねばならぬのも自然であった。神の燈火は制約があきらかな制約として裸形にされるところで光を放ち、肉の悲哀をくぐらぬ想像の発露の、無限定なものだけが飛び交う夢野における幻想の類ではなく、制約の輪郭が澄むほどに燈火は明るみを増し、肉の冥さが増すほどに霊は自らの明るさを加え、われわれの魂の霊的な垂

線は、個体の輪郭の凝固を深めてゆく肉体の伽藍の中で立ち昇り、霊者としての歓びが肉体者としての悲哀の水面に浮び出る。諸々の限定者の内部に点されるその燈火を、地上の宝として手にし得ぬわれらの天上の宝と呼び、その燈火こそ大宇宙に精神の火をあかあかと点し続ける光源であり、父なる神の国の内実は、一切の限定者のうちに宿された天上の宝の総合であるだろう。肉は翼と化さず、翼と化し得ぬ肉の悲哀の、その自覚の中に、霊の翼は発つだろう。行き暮れて倒れたおまえの内部にこそ歓喜の渦が姿を現わし、そこに光の船が生れるだろう。肉の転身の願いを諦めて言葉の転身を果たし、岩戸開きを諦めて岩戸開きする渾身の岩戸開きよ。われわれはもはや肉の翼を望まず。おまえの全身がひかり輝くのではなく、肉はただひたすらに灰燼として倒れ、人間の個の宿命を体して縊れていけよ。

肉体を沈めて言葉を発たせ、おまえの顔を空と観じておまえを生きる現象界の澄明は、存在から存在が見つめられて地上に幽閉されていた病める顔の、顔が無からの遙かな気配として感じなおされて顔の無限が想われ、新生の領土に置きなおされた顔の甦り、顔は一個の無限を封じた泉、地上での他者との顔の比較ではなく顔の一人であり、顔の自愛ではなく顔の抽象であり、顔の滅ではなく顔の透である。霊を受けた言葉の魂は、すでに他者と他者とのあらゆる争乱、一切の毀誉褒貶に関与せず、個の独自性は衣裳と衣裳が優劣を競って相争う外界への主張をつくらず、外界と内界の境界を走る車輪である。つねにひとつの独特な殉教を強いられている言葉よ、地上の喧噪の世界を離れて行くべき方向を見出した言葉が、群がる肉体の市場を貫くことで清い庭に届く透明の力線と化してゆく……。地上の花々を見て見ぬおまえの盲目の中に天上の花を見つめているおまえの顔があらわれ、おまえの知らぬおまえの顔がおまえから旅立ってゆき、同じように遠ざかってゆく見知らぬ彼等の顔に出逢った。交感の悩ましい火花を散らす奥深い魂の目合いよ、

おまえの光の船はいま、おまえを越え、おまえの他者達を越え、隠されていた全体の未知なる王国を流離っているのだ。

――ひとときの鎮魂の後の、鎮魂に破れて陥らざるを得なかった惑乱、そして惑乱の後の、訪れるであろう新しい朝の静けさよ、その静けさの中での……、もはや一人であるのでもなく……、そこにおまえが存在することの洗礼、そこにおまえが在ることの表現、おまえがそうでしかないことの久遠の行き暮れに、一片の光を投げ入れて、おまえがそうであることの歓びへ。まさに一塊の自由、ひとつの燃える心、ただそれだけのことに、無限なるものの風よ吹け。

（空のふなうたのための五章・第三）